

# 景物としての「鳴く鹿」

— 詠物歌と物色の倭製 —

井上さやか

一 はじめに

『万葉集』において、鹿を詠んだ歌は六十首ある。なかでも、その鳴き声を表現した歌が多く、以後の和歌史においても同様の傾向がみられる。<sup>(1)</sup>

そうした万葉集にみえる鹿鳴歌については、中国文学の鹿鳴詩の影響を受けていることが早くから指摘されている。

岡崎義恵は「万葉集と季節」のなかで鹿を秋の景物としてあげ、日本固有のものとしながらも、「鹿鳴」が『詩経』にも見え中国趣味であることに触れている。<sup>(2)</sup>

また中西進氏は、「雄略御製の伝誦」のなかで、鹿を詠む歌のほとんどが奈良朝の作であること、歌の偏在が認められ、それが『詩経』の影響を受けての編者の意図であろうこと、などを指摘している。<sup>(3)</sup>

これには、雄略御製歌が鹿鳴詩の影響下にはないという反論<sup>(4)</sup>や、時期的な偏在や鹿の文芸情趣化の過程は捉え難いという反論<sup>(5)</sup>もある。しかし、これらの議論は、鹿を詠んだ歌と「鹿鳴」を題とする意識とに分けて考えたとき、並立も可能であるように思われる。つまり、

鹿の歌の表現と、「鹿鳴」を題として歌を詠むこと、そして題に「鹿鳴」と付け鹿の歌を一括して収載すること、といった点の違いが窺えるのである。

集中における鹿の歌のなかに、次のような歌群がある。

## イ 大伴宿祢家持秋歌三首

秋野あきのの 開流あきほ秋芽子あきはぎ 秋風あきかぜ 麿流なびけるうへ上尔あきのつゆおけり 秋露あきのつゆ置有あきのつゆおけり

(8一五九七)

棹さ壯鹿をしか之の 朝立あさたつ野邊のへ乃の 秋芽あきはぎ子に 玉跡たまと見みる左右まで 置有おける白露しらつゆ

(8一五九八)

狭尾さ壯鹿をしか乃の 胸別むなわけ可か毛かも 秋芽あきはぎ子に 散過ちりすぎ鷄にける類さかり 盛可さかり毛かも行い流ゆる

(8一五九九)

## 右天平十五年癸未秋八月見物色作

口くち 大伴おほ宿祢すね家持けもち鹿鳴か歌うた二首ふたうた  
山やま妣は姑こ乃の 相響あひこ左右よ 妻戀つまこひ尔に 鹿鳴かなく山邊やまへ 獨耳ひとり為な手て

(8一六〇二)

頃者このころ之の 朝開あさ爾に聞者きけば 足日あしひ木篋きの 山呼やまよ令響びとめ 狭尾さ壯鹿をしか鹿鳴かなく哭なくも

(8一六〇三)

## 右二首天平十五年癸未八月十六日作

右はともに、天平十五年八月に大伴家持が詠んだ歌である。歌群

イは、題詞に「秋歌」とあるとおり、三首ともに秋が詠まれているなかで、一五九八・一五九九番歌には共通してサヲシカということばが詠み込まれていることが注目される。そして歌群ロでは、「鹿鳴」を題とし、二首ともに鳴く鹿が詠まれている。

かつて、三首に共通するアキハギということばを中心に、集中のハギの歌について考えたことがあるが、秋の代表的な景物であるハギと詠みあわせられたものが、鹿であった。歌群イの一五九八・一五九九番歌ともにアキハギと鹿が詠みあわせられ、それが「秋歌」と題してあるところや、歌群ロの題とその二首の鳴く鹿の表現から、鹿もまた秋季の景物として認識されていたことを窺うことができる。

しかも、歌群イの左注によれば、これら三首は「物色」を見て作った歌であるという。芳賀紀雄氏は、この左注に注目して家持の詠物意識をとらえ、それが作歌活動の底流をなすものと指摘されている。<sup>①</sup>

この「物色」という語彙は集中でも三例しかみられない。他の二例のうち一例は家持による用例（20四四八四左注）であり、もう一例は大伴池主による用例（17三九六七序文）である。この二歌人には親交がありともに中国文学を志向したので、中国文学の概念語を共通して取り上げたものと指摘されている。<sup>②</sup>

筆者は、この「物色」を中国文学の概念語としてではなく、日本の上代文学における現象を理解するための概念として捉え得ると考えて、これを〈物色の倭製〉とみている。<sup>③</sup>

すなわち、中国文学で使用される「物色」とは、中国の四季観に基づいてそれぞれの季節に特有の風物やその状態をいうものであるが、万葉集における物色は、中国の四季観を取り入れながらも、日本列島の自然環境に基づいて新たに独自に形成されたとみられる。漢詩に対して認識された倭歌において、こうした〈物色の倭製〉が行われたと考えられるのである。

これまでに、中国文献に例のない「沫雪」や「秋芽子」、「鍾礼」という語を取り上げ、日中の自然環境の相違に基づく物色の倭製について考察してきた。地理的な条件を踏まえた上で日中文学の「物色」を比較してみることで、両文化の固有性を端的にうかがうことができるのではないかと考えたからである。もとより、文化的背景が自然地理的な条件だけであるとは思わないが、無視できない大きな背景のひとつとして捉え、それが漢字文化圏のなかでの地域的特色をどのように形成していくのかを、〈物色の倭製〉を通して考えてきた。

そうしたことを踏まえて、家持の歌で秋の物色とされていた鹿を考えたとき、中国文学にも見出せる語彙でありながらも、日中間での認識には大きな違いがあるのでないかという疑問が湧いてくる。

そこで本稿では、秋の物色とされた鹿を中国文学の鹿の例と比較対照し、鹿を詠む歌の表現と詠題としての「鹿鳴」を区別しながら、万葉歌における物色としての鹿の、中国文学との相違と、それらが

どのような文化的背景の中で形成されていったのかということを明らかにしてみたい。

## 二 中国文学における「鹿鳴」

まずは、中国文学における「鹿鳴」の用例について確認しておく。それは、次の鹿鳴詩に端を発するといえる。

鹿鳴

呦呦鹿鳴，食野之苹。

我有嘉賓，鼓瑟吹笙。

吹笙鼓簧，承筐是將。

人之好我，示我周行。

呦呦鹿鳴，食野之蒿。

我有嘉賓，德音孔昭。

視民不怵，君子是則是儆。

我有旨酒，嘉賓式燕以敖。

呦呦鹿鳴，食野之芩。

我有嘉賓，鼓瑟鼓琴。

鼓瑟鼓琴，和樂且湛。

我有旨酒，以燕樂嘉賓之心。（『詩經』第九小雅、鹿鳴之什）

呦呦と鹿が鳴き野の草をはむ様子が、君主が臣下や賓客を招いて饗宴することになぞらえられて詠まれている。ここでの鹿の鳴き声は、一般に仲間を集めるためと理解されている。

この鹿鳴詩は小雅とあることから、もともとは周王朝の正樂としてうたわれるものであったことがわかる。

そうした鹿鳴詩の樂曲としての位置付けは、『文心雕龍』（卷二、樂府第七）や嵇叔夜「琴賦一首并序」（『文選』第十八卷、音樂）の記述からも窺うことができる。

また、魏武帝「短歌行」（『文選』第二十七卷、樂府二首）や曹子建「求通親親表」（『文選』第三十七卷、表）、『藝文類聚』（第九十五卷、獸部下「鹿」）などにみえるように、君臣和樂の宴の代名詞として「鹿鳴」が使用されていることは、よく知られているとおりである。

なかで、次にあげるような使い分けの例もみられる。

毛詩曰、鹿鳴、燕會臣嘉賓也。常棣、燕兄弟。湛露、天子燕諸侯也。（『藝文類聚』第三十九卷、礼部中「燕會」）

ここでは、「鹿鳴」とは臣嘉賓の宴会であり、「常棣」とは兄弟の宴であり、「湛露」とは天子が諸侯を饗宴することであるとされている。いうまでもなく「鹿鳴」は『詩經』の鹿鳴詩を指すが、ほか

の「常棣」「湛露」もまた『詩経』の詩題である。「常棣」は「鹿鳴」と同じ「鹿鳴之什」の中の詩であり、「湛露」は同じく小雅の「南有嘉魚之什」の詩の一つである。右は各篇の毛序を抜粋したものとみられ、それぞれの詩の解釈には諸説あるが、少なくとも毛詩においては、兄弟同士の宴や天子が諸侯を饗する宴と分けて、「鹿鳴」が群臣や賓客の宴席と解釈されていたらしいことがわかる。

ほかに、友との別離の宴を表す場合もある。

骨肉縁枝葉、結交亦相因。

四海皆兄弟、誰為行路人。

況我連枝樹、與子同一身。

昔為鴛與鴦、今為參與辰。

昔者常相近、逸若胡與秦。

惟念當離別、恩情日以新。

鹿鳴思草、可以宴嘉賓。

我有一罇酒、欲以贈遠人。

願子留斟酌、敝此平生親。

（『文選』第二十九卷、雜詩上「詩四首」蘇子卿）

右の詩は、『藝文類聚』第二十九卷の人部十三「別上」の項にも採られている。「鹿鳴」が嘉賓への宴であることをあげて、自らの

友人を送別する宴と重ねられている。

君臣和楽にせよ友との別離にせよ、『詩経』の鹿鳴詩を典拠として、「鹿鳴」が宴席の代名詞のように用いられていたことに違いない。

中国の文献ではほかに、「鹿鳴澤」（『藝文類聚』第二十七卷、人部十一「行旅」）や「鳴鹿」（『春秋左氏伝』成公伝十六年条）という地名としての用例もみられるが、これらは鹿鳴詩を典拠とした用例とは区別してよいであろう。

以上のように、鹿が野で草を食みつつ鳴くさまを、友を呼び饗宴することの興（譬え）として表現した『詩経』の鹿鳴詩が、中国文学における多くの「鹿鳴」の表現の典拠であり、宴の代名詞のように用いられていたことが確認できる。

では、詩題としてはどうかであろうか。

先にあげたように、『詩経』の鹿鳴詩は「鹿鳴」の題を持っている。また、『詩経』の鹿鳴詩を筆頭とした十詩は、「鹿鳴之什」と題され、一括されている。ただし、こうした大雅・小雅における「一之什」とは、一卷とされた十篇の名を取るだけであって、十篇に共通する主題を意味するのではない。

一方、後述するように、万葉集中では「鹿鳴」が歌群を一括する題として認められる。しかもそれが秋の景物と認識されていたらしいことは、既に述べたとおりである。

ところが、秋季に関わっては、わずかに次のような用例が見出せるだけである。

魏陳王曹植獵表曰、於七月伏鹿鳴時、四月五月射雉之際、此正

樂獵之時、〔藝文類聚〕第九十五卷獸部下「鹿」

秋七月が「鹿鳴時」と表現されてはいるが、鹿狩りの時期をいつたものであって、季節の情趣として捉えた表現とまではいえない。また、次のような例もみられる。

爾乃孟陬發節、雷隱蟄驚、散葉夷柯、芳礪飾萌、麥萋萋於旄丘、柳依依於高城、相睢鳩之集河、觀鳴鹿之食苹、沂泗遠兮清川急、秋冬、近兮緒風襲、風流蕙兮水增瀾、訴愁衿兮鑑戚顏、愁盈根而瀕際、戚發條而成端、……

〔宋書〕列伝卷六十七、列伝第二十七「謝靈運」

秋の景として鳴く鹿が苹を食む様子が表されている。しかし、詩人である謝靈運の列伝中の記述であって、ここに秋の物色としての定着をみることはできない。

さらに、『荆楚歲時記』や『禮記』月令をみても、「鹿鳴」が秋の景物という認識はとくにみられないといえる。

中国文学における表現としての「鹿鳴」は、『詩経』を典拠とし

て宴の代名詞のように用いられているが、詩題としての「鹿鳴」については『詩経』の例だけで、秋の物色といった認識はみられないということが確認できる。

### 三 万葉集の「鹿」と記紀・風土記の「鹿」

では次に、前節でみてきた中国文学の「鹿鳴」と比較しながら、万葉集中の「鹿」の歌についてみてみよう。

万葉集では、鹿の鳴き声をどのように捉え、どのように表現しているのだろうか。

早くは、岡崎前掲論文が、鹿を秋の景物として次のようにまとめている<sup>⑩</sup>。

動物では鹿が最も多く、これは四季を通じて霍公鳥に次ぐものである。鹿の鳴く声はすでに「日本書紀」にも菟餓野の鹿の伝説となつて現れており、「万葉」初期にも「夕されば小椋の山に臥す鹿の今夜は鳴かず寝ねにけらしも」の御製が雄略天皇にあり、少し語句を異にして同様の御製が舒明天皇にもある。

「鹿鳴」は「詩経」にも見え、中国趣味でもあるけれども、また日本固有のものとも考えられる。日本では鹿の声は妻恋うものと感ぜられ、萩は鹿の妻と考えられ、歌人の情を動かしてい

ることが多い。

従来の集中の鹿という語の捉え方は、おおむね右のような内容に集約されるといってよいだろう。『日本書紀』の菟餓野の伝説とあわせて万葉歌を理解しようとし、妻を恋う鹿が特徴として指摘されている。

鹿を詠む歌のなかでも最初期の例とされる歌が、岡崎論文が指摘する次の二首である。

暮去者 小倉乃山尔 鳴鹿者 今夜波不鳴 寐宿家良思母

(8一五一)

暮去者 小椋山尔 臥鹿之 今夜者不鳴 寐家良霜

(9一六六四)

右の二首は小異歌で、従来から口承過程や歌の書記をめぐって盛んに論じられてきた歌である<sup>①</sup>。しかし、どちらも後世に仮託された歌である可能性を否定することができず、作歌時期は特定できないといっってよいだろう。

この二首の關係を探る際に、しばしば資料として次にあげる『日本書紀』の鹿の記事が提示されてきたのである。

秋七月、天皇與皇后、居高台而避暑。時每夜、自菟餓野、有聞鹿鳴。其声寥亮而悲之。共起可怜之情。及月尽、以鹿鳴不聆。

爰天皇語皇后曰、当是夕、而鹿不鳴。其何由焉。明日、猪名巢佐伯部献苞苴。天皇令膳夫以問曰、其苞苴何物也。对言、牡鹿也。問之、何处鹿也。曰、菟餓野。時天皇以為、是苞苴者、必其鳴鹿也。因語皇后曰、朕比有懷抱、聞鹿声而慰之。今推佐伯部獲鹿之日夜及山野、即当鳴鹿。其人雖不知朕之愛、以適逢獵獲、猶不得已而有恨。故佐伯部不欲近於皇居。乃令有司、移鄉于安芸淳田。此今淳田佐伯部之祖也。俗曰、昔有一人、往菟餓宿于野中。時二鹿臥傍。將及鷄鳴、牡鹿謂牝鹿曰、吾今夜夢之、白霜多降之覆吾身。是何祥焉。牝鹿答曰、汝之出行、必為人見射而死。即以白塩塗其身、如霜素之庇也。時宿人心裏異之。未及味爽、有獵人、以射牡鹿而殺。是以、時人諺曰、鳴牡鹿矣、随相夢也。

〔『日本書紀』仁德天皇三十八年七月条〕

右の記事は、鹿の鳴く声を愛でていた天皇が、鳴き声の絶えた理由を狩られた故と知り、嘆くものである。はじめに掲げた大伴家持の万葉歌のなかで解釈するならば、鹿の鳴き声が止むのは妻を得た証拠であるが、この説話では死んだことが理由である。鳴く鹿の概念の大きな違いが感じられる。

そして、秋七月の出来事とはいえ、万葉集のようにハギとの取り

合わせはみられず、秋の物色というような認識とは見なし難い。ただし、秋の繁殖期の鹿の行動を踏まえた説話であるとは思われる。さらにいえば、中国文学にみられた秋七月が鹿狩りの時期であること（『藝文類聚』第九十五卷獸部下「鹿」）を踏まえた可能性もあるだろう。

後半の「俗曰」以下の説話では、伏す鹿が語られ、鳴く鹿のモチーフとは言い難い。夢占によってもたらされる結果を踏まえた諺には鳴く鹿の語があるが、説話が鹿の夫婦についてであるとはいっても、万葉歌のような妻を恋う「鳴く鹿」の概念からはほど遠いと言い得るであろう。なお、これとほぼ同じ内容が、『釈日本紀』第十二に引かれた撰津国風土記逸文にもみえる。

また、「鹿」の語は次の記事中にもみられる。

築立稚室葛根、築立柱者、此家長御心之鎮也。取挙棟梁者、此家長御心之林也。取置椽椽者、此家長御心之齊也。取置蘆萑者、此家長御心之平也。「蘆萑、此云京都利。萑音之潤反。」。取結繩葛者、此家長御寿之堅也。取葺草葉者、此家長御富之余也。出雲者新墾、々々之十握稻、於淺甕釀酒、美飲喫哉「美飲喫哉、此云于魔羅備鳥野羅甫屢柯倭。」。吾子等。「子者、男子之通称也。」。脚日本此傍山、牡鹿之角「鹿、此云左烏子加。」。挙而吾儂者、旨酒餌香市不以直買、手掌悽亮「手掌悽亮、此云陀那則

挙謀耶羅々備。」。拍上賜、吾常世等。

（『日本書紀』顕宗天皇即位前紀、室寿の詞）

割注に、「牡鹿」をサヲシカと訓むべきことが示されており、冒頭の家持歌にも見出せる語彙であることから、従来から万葉集中のサヲシカの用例と重ねられている。

しかし、それはあくまでも語彙の用例であって、万葉歌に見られるような妻を恋う鹿の表現という内容は見出し得ないのである。

『古事記』には、次のような「鹿」の挿話があるばかりである。

自其入幸、悉言向荒夫琉蝦夷等、亦、平和山河荒神等而、還上幸時、到足柄之坂本、於食御粮処、其坂神化白鹿而来立。尔、即以其咋遣之蒜片端待打者、中其目乃打殺也。

（『古事記』中巻景行天皇「七」弟橘比売命）

淡海之久多「此二字以音。」綿之蚊屋野、多在猪鹿。其立足者、如我原。指举角者、如枯松。

（『古事記』下巻安康天皇「三」市辺之忍齒王之難）

右の挿話にある「鹿」は、狩の対象でしかなく、神の化身として現れた白鹿にしても、万葉集にみられたような季節の物色や歌の題としての鳴く鹿とは、まったく別のものと言うしかない。



万葉歌を理解するためにこうした表現を援用することは、慎重にすべきであるだろう。

翻って、先にあげた二首の万葉集における表現の大きな違いは、前者が鳴く鹿を詠んでいるのに対して、後者が伏す鹿を詠んでいる点である。ともに毎夜鳴く鹿が今夜は鳴かないということを詠んでいるが、鹿が鳴くことと鳴かないことの意味付けは、表現されず言外にあるといえる。

こうした表現が成り立つには、『日本書紀』などの挿話ではなく、「鳴く鹿」の歌の類型表現がある程度定着している必要があるのではないだろうか。二首の表現が、類型化の中に見られるとすれば、二首の作歌年代も大きく下る可能性は否定できないだろう。

#### 四 “鳴く鹿”の表現類型の形成

では、冒頭に掲げた家持歌にみられた、ハギとの取り合わせや妻を恋う“鳴く鹿”のモチーフは、集中でどのように見出せるのだろうか。

甲斐睦朗・石黒由香里両氏による論文では、万葉人はその姿よりも「あはれ」を誘う鹿の声に心ひかれていたと指摘され、鳴く鹿が二十七例（うち妻恋のため八例）、呼ぶ鹿が九例（すべて「妻呼ぶ」あり、そうした鹿の歌を静として、伏す鹿（七例）や行く鹿（四例）

の動に対する表現とみている。また、鹿と萩を取り合わせた歌が十二例あることや、萩以外に鹿とともに歌われた植物に女郎花・尾花・紫草などがあることも指摘した上で、ハギと鹿が共に秋を代表する動物であり植物であったため、繰り返し歌われる中で、様々な意味が付与され、徐々に歌ことばとしての基盤を形成していったとされている。

しかし、物色を意識したことで、“鳴く鹿”の表現型が成立することになった可能性もあるのではないかと考えられる。

そこでまず、指摘のあった鳴く鹿が妻呼びに関わって表現された用例をみて、そうした点について確認していこう。便宜上、それぞれに通し番号を付しておく。

- 1 …… 露霜乃 秋去来者 射駒山 飛火賀嶋丹 芽乃枝乎  
石辛見散之 狭男壮鹿者 妻呼令動 …… (6一〇四七)
- 2 吉名張乃 猪養山尔 伏鹿之 孀呼音乎 聞之登聞思佐  
(8一五六一)
- 3 比日之 秋朝開尔 霧隠 妻呼雄鹿之 音之亮左  
(10二二四一)
- 4 足日木笑 山從來世波 左小壯鹿之 妻呼音 聞益物乎  
(10二二四八)
- 5 山遠 京尔之有者 狭小壯鹿之 妻呼音者 乏毛有香



6 左小壯鹿之 妻喚山之 岳邊在 早田者不茹 霜者雖零  
(10二二五一)

7 多可麻刀能 秋野乃宇倍能 安佐疑里尔 都麻欲夫乎之可  
伊泥多都良武可  
(10二二二〇)  
(20四三一九)

用例1は、「悲寧樂故郷作歌」と題された田辺福麻呂歌集歌での用例である。サヲシカがハギの枝を散らし妻呼びをしている様が表現されている。こうした妻呼びは、実際に牡鹿が繁殖期に雌鹿を呼んでしきりに鳴くことによると考えられている。中国文学においては、鹿が鳴くのは友を呼ぶと理解されていたことと比べて、まず鹿の鳴き声の理解に大きな相違点があるといえる。ここでは、ハギとサヲシカが詠み合わせられていることに注目しておきたい。

次の用例2では、鹿の鳴き声を妻呼ぶ声と捉えている点で、用例1と類似している。ここでは鳴く鹿ではなく伏す鹿が詠まれてはいるが、ツマヨブコエやキクガトモシサとあることから、鳴く鹿のモチーフが踏まえられているといえる。

用例3では、ツマヨブシカと表現され、鳴く鹿が妻呼びとして成句のように用いられていることが注意される。秋の景としてコエノサヤケサを主眼に詠まれていることも重要であろう。

用例4と5も、サヲシカノツマヨブコエとあって、鳴く鹿と妻呼

びが重ね合わせられていたと理解できる。

用例6もまた、サヲシカノツマヨブヤマという表現で、鳴く鹿と妻呼びが用いられている。しかもそれは山の形容として用いられており、鳴く鹿のモチーフが秋季を意味したとみられる例である。

用例7でも、ツマヨブヲシカと表現され、アキハギと詠み合わせられている。

作歌時期をみると、用例3と6は作者未詳であり秋の雑歌と詠物題によって類従されていて判然としないが、用例2は大伴坂上郎女で、活動時期から平城遷都後から天平初年くらいの時期が想定できる。それよりやや遅く、天平時代に入って活動のみられる田辺福麻呂作と考えられる用例1と、同時期の大伴家持の用例7があることになる。

以上のように、鹿の鳴くさまは妻呼びとして捉えられ、(アキ)ハギと詠み合わせられており、そうした類型が平城遷都後に集中して見出せることが確認できる。

また、ツマヨビとは表現されないものの、ほぼ同義とみられる例に、次のような歌があげられる。

8 左男壯鹿之 妻整登 鳴音之 将至極 麋芽子原  
(10二二四二)

9 左小壯鹿之 妻問時尔 月乎吉三 切木四之泣所聞 今時

来等霜くらしも

(10二二二一)

10 秋芽子之あきはぎの 咲有野邊者さきたるのべは 左少壯鹿會さをしかかの 露乎別乍つゆをわけつ 嫺問四家つまとひしけ

類る

(10二二五三)

11 秋芽子乎あきはぎを 妻問鹿許曾つまどふしかこそ 一子二ひとりごに 子持有跡五十戸こもてりといへ 鹿兒自かこじ

物もの 吾獨子之あがひとりごの 草枕くさまくら 客一師往者たびにしゆけは ……

(9一七九〇)

12 奥山尔おくやまに 住云男鹿之すむとふしかの 初夜不去ゆふさらず 妻問芽子乃つまとふはぎの 散久惜裳ちらまくをしも

(10二〇九八)

用例8では、サヲシカの鳴く声がツマトトノフと表現されている。

これは妻を呼ぶことと理解してよいであろう。

用例9〜12でも、ツマドフことが表現されて、鳴く鹿を人間の妻

問いになぞらえていることが窺える。

こうした妻呼びや妻問いは、ともに鹿の鳴く行為の擬人化として

理解できるであろう。

さらに用例11・12では(アキ)ハギを妻問うと表現され、ハギを

も擬人化して鹿の妻とみなす概念までも窺うことができる。

ほかに、類似する表現が次のようにみられる。

13 吾岳尔わがをかに 棹壯鹿来鳴さをしかきなく 先芽之はつはぎの 花孀問尔はなづまとひこ 来鳴棹牡鹿きなくさをしか

(8一五四一)

14 竿志鹿之さをしかの 心相念こころあひおもふ 秋芽子之あきはぎの 鍾礼零丹しづれのかるに 落僧惜毛ちらくしをしも

(10二〇九四)

15 妻戀尔つまこひに 鹿鳴山邊之あひなくやまへの 秋芽子者あきはぎは 露霜寒つゆしきむみ 盛須疑由君さかりすぎゆく

(8一六〇〇)

16 山妣姑乃やまびこの 相響左右あひとよむまで 妻恋尔つまこひに 鹿鳴山邊尔あひなくやまへに 独耳為手ひとりのみして

(8一六〇二)

17 秋芽子之あきはぎの 散去見ちりゆくみれば 爵三おほほしみ 妻戀為良思つまこひすらし 棹壯鹿鳴母さをしかなくも

(10二一五〇)

用例13は、鳴くサヲシカがハギを花妻として妻問いすると表現さ

れている。大伴旅人の歌で、神龜〜天平初年の作歌とみられるが、

そうした時期にすでにこのようなサヲシカとハギの取り合わせと花

妻問いという概念がみられることは注意される。さきにみた用例の

時期と重なっており、「鳴く鹿」をモチーフにした歌が詠まれるよ

うになった当初から、こうした表現の類型があったとみることが可

能であろう。

用例14はサヲシカとアキハギが心相思う関係として表現されてい

ることから、先述のような鳴く鹿の概念が根底にあって成立する表

現であると考えられる。

用例15〜17も、鳴く鹿を妻恋として表現する用例であり、石川廣

成と大伴家持とともに天平後期に活動が確認できる。ほかに、

「秋芽子師弩云あきはぎしのぎ 鳴鹿毛なくしかも 妻尔恋楽苦つまにこみらく」(丹比真人某8一六〇九)と

いった表現がみられる。

以上の用例についてまとめると、鹿を詠む歌の大部分が鳴くさまを妻呼びとして表現した歌であり、指摘されてきたとおり鹿の歌の大きな特徴といえる。そして、そうした類型は平城遷都後ににわかに見出されるようになる、という傾向が窺えるといえよう。

ここで、こうした「鳴く鹿」の表現類型の成立がいつ頃であったのか、もう少しみておくことにしたい。

冒頭にあげた家持の歌は、天平十五年の作歌であることが判明していたので、ここに再度掲出し、その表現についてみてみよう。

18 棹牡鹿之 朝立野辺乃 秋芽子尔 玉跡見左右 置有白露

(8一五九八)

19 狭尾牡鹿乃 胸别尔可毛 秋芽子乃 散過鶏類 盛可毛行

(8一五九九)

20 山妣姑乃 相響左右 妻恋尔 鹿鳴山邊尔 独耳為手

(8一六〇二)

21 頃者之 朝開尔聞者 足日木篋 山呼令響 狭尾牡鹿鳴哭

(8一六〇三)

用例18・19は、アキハギとサヲシカの詠み合わせがみられ、用例20・21は、妻恋に鳴く鹿とおそらくそれによる山彦や山呼び響むと

いった表現がみられる。

これらはやや異なる位相を示すといえるが、それは「秋歌」という題と、「鹿鳴」という題による違いを意識した結果ではないかと考えられる。先の類型の用例からみて、家持は十分に先例や同時期の「鳴く鹿」の歌の表現を知りつつ、これらの歌を詠んだと思われる。これらの用例の多くが、秋雑歌や「鹿鳴」に収められていたことも注意され、家持の時代には、こうした「鳴く鹿」のモチーフがひじょうに明確なものであったと推察される。

次に、比較的初期の歌についてもみてみよう。

22 夏野去 小牡鹿之角乃 束間毛 妹之心乎 忘而念哉

(4五〇二)

23 木国之 昔弓雄之 響矢用 鹿取靡 坂上尔曾安留

(9一六七八)

24 秋去者 今毛見如 妻恋尔 鹿将鳴山曾 高野原之字倍

(1八四)

用例22では、鹿は序詞のなかに登場するに過ぎず、鳴く鹿を詠む歌でもない。束の間という語を導く表現にサヲシカの角が用いられているだけである。作者は柿本人麻呂とされており、活動時期から持統天皇代か文武天皇代の作歌であろうと考えられる。

また、次の用例23でも、鳴く鹿は詠まれていない。歌の作者は未詳であるが、この歌は大宝元年（七〇一）十月の持統上皇と文武天皇による紀伊国行幸の際の歌群に収められている。したがって、人麻呂歌とほぼ同時代の歌であるといえる。

次の用例24は長皇子の歌で、長皇子は霊龜元年（七一五）に没している。それ以前の作歌であるといえる。この歌には妻恋という語が詠まれており、鳴く鹿は妻を呼んでいるという理解が根底にある表現であると思われる。この用例が、鳴く鹿を妻呼びと捉える類型の先駆的な例といえるだろう。しかも、アキサラバとあって、秋の事物であるという認識さえ窺うことができるのである。

こうした「鳴く鹿」の類型を題としたのが、巻十の「詠鹿鳴」であったと考えられる。その歌群のなかには、これまでみてきたような妻呼びなどの表現で擬人化された「鳴く鹿」が集中してみられた上に、次にあげる季節を思う風流な人間として表現されるにまで至った用例がみられる。

25 鴈来 芽子者散跡 左小仕鹿之 鳴成音毛 裏觸丹来 (10二二四四)

26 秋芽子之 散過去者 左小仕鹿者 和備鳴將為名 不見者 乏焉 (10二二五二)

27 奈何仕鹿之 和備鳴為成 盖毛 秋野之芽子也 繁將落

28 秋芽子之 開有野邊 左仕鹿者 落卷惜見 鳴去物乎 (10二二五五)

右の四首はいずれも「詠鹿鳴」に収められた歌であるが、用例25は来雁と散る萩が秋の終わりを表し、それを憂えているとして鳴く鹿の声を捉えている。用例26・27・28も散る萩についてだけであるが、同様の表現を持つといえるだろう。

以上、みてきたように、「鳴く鹿」の表現の類型化が、平城遷都後ににわかに行われるようになるといえる。そしてそれは、中国文学の「鹿鳴」とはまったく異なる表現の発想であると確認できるのである。

なお、馬駿氏によって、例外的に中国文学の「鹿鳴」の影響下にある用例が一例（四五七〇）指摘されている<sup>13</sup>。麻田春陽の作歌で、対外交流の最先端に位する筑紫では、かの「梅花宴」のように、「鹿鳴」が当代の歌壇における文芸の享受のテーマのひとつだったとされている。

こうした用例があることからいって、当時の人々が中国文学の「鹿鳴」を享受していたことは間違いないのであるが、万葉集においては、鳴く鹿という表現の物色化と擬人化という類型が特徴的であり、それが秋を憂うという風流な擬人化にまで至っていることが

確認できる。そして、こうした表現は、“鳴く鹿”が秋の物色として認識されることによって生まれたといひ得るだろう。

### 五 「鹿鳴」と題すること

前節までに確認してきたとおり、万葉集中では中国文学の「鹿鳴」とは異なる発想に基づく、“鳴く鹿”の物色としての認識と表現の類型がみられた。

では、万葉歌の題としての「鹿鳴」は、どのように捉えられるのだろうか。

まずは中西氏が指摘した点を確認しておく。

卷十の分類は「詠鹿鳴」とあって、単に「詠鹿」とか「詠鳴鹿」とかではない。この用語は勿論詩経の語で、懷風藻にも見られ、既に十分浸透していた知識であったが、編者の一括して収める意図には、十分詩経の連想があったといひ得るであろう。

編者が一括して鹿を詠む歌を収めた意図に、中国文学のとくに『詩経』の影響をみている。ここで指摘されている卷十の「鹿鳴」の題を持つ歌群は、次にあげるとおりである。前掲の歌もあるが、歌群を一括して掲出しておく。

### 詠鹿鳴

比日之 秋朝開爾 霧隱 妻呼雄鹿之 音之亮左

(10 二一四一)

左男壯鹿之 妻整登 鳴音之 将至極 靡芽子原

(10 二一四二)

於君戀 裏觸居者 敷野之 秋芽子凌 左小壯鹿鳴裳

(10 二一四三)

鴈来 芽子者散跡 左小壯鹿之 鳴成音毛 裏觸丹来

(10 二一四四)

秋芽子之 戀裳不盡者 左壯鹿之 聲伊續伊繼 戀許增益焉

(10 二一四五)

山近 家哉可居 左小壯鹿乃 音乎聞乍 宿不勝鴨

(10 二一四六)

山邊尔 射去薩雄者 雖大有 山尔文野尔文 沙少壯鹿鳴母

(10 二一四七)

足日木笑 山從來世波 左小壯鹿之 妻呼音 聞益物乎

(10 二一四八)

山邊庭 薩雄乃祢良比 恐跡 小壯鹿鳴成 妻之眼乎欲焉

(10 二一四九)

秋芽子之 散去見 鬱三 妻戀為良思 棹壯鹿鳴母

(10二二五〇)

山遠 京尔之有者 狭小壮鹿之 妻呼音者 乏毛有香

(10二二五一)

秋芽子之 散過去者 左小壮鹿者 和備鳴將為名 不見者之焉

(10二二五二)

秋芽子之 咲有野邊者 左少壮鹿會 露乎別乍 孀問四家類

(10二二五三)

奈何壮鹿之 和備鳴為成 盖毛 秋野之芽子也 繁將落

(10二二五四)

秋芽子之 開有野邊 左壮鹿者 落卷惜見 鳴去物乎

(10二二五五)

足日木乃 山之跡陰尔 鳴鹿之 聲聞為八方 山田守酢兒

(10二二五六)

これら十六首は、いずれも「鹿」の語を詠み込んだ歌であり、しかもすべてに鳴き声が詠まれているという特徴がある。表現内容については後述するが、この「鹿鳴」の題が、鹿を詠んだ歌を一括する意識を表していることは明らかであろう。それぞれの歌の作者や作歌時期は特定できないが、それらを一括する題として「詠鹿鳴」とし、巻十に収載されたとみられる。

ほかに、題に「鹿」の語を持つ例として、冒頭にあげた歌群ロ

がある。題詞に「大伴宿祢家持鹿鳴歌二首」とあり、この場合も二首ともに鹿の鳴き声を詠んでいる。おそらくここでも、意識的に主題を掲げたとみてよいだろう。

左注によれば、当該歌は天平十五年八月十六日の作歌とあり、歌群イの「秋歌三首」もまた家持の作歌で天平十五年秋八月の作とあったことからみて、家持が同時期に景物を題として意識しつつ詠んだ歌群であり、歌群ロにおいては、秋の〈物色〉として「鹿鳴」が特化されたものと考えられる。

また、「鹿鳴」ではないが、「鳴鹿」を題に持つ例も見出せる。

湯原王鳴鹿歌一首

秋芽之 落乃乱尔 呼立而 鳴奈流鹿之 音遥者

(8一五五〇)

これも、鳴く鹿を詠んだ歌の題として「鳴鹿」としたとみられる。歌の作者が題を付したかどうかは不明であるが、その意味するところは家持の「鹿鳴」の歌と同じであったと考えられる。

以上は、いずれも秋の雑歌部に収められており、当該部の歌群編者にとっては「鹿鳴（鳴鹿）」が秋の詠題として認識されていたとみてよいだろう。そしてこうした題をもって歌が一括される以前に、「鳴く鹿」のモチーフが歌の素材となっていたことも窺わせる。

さらに、次の長歌も「鳴鹿」を題に持つ例である。

詠鳴鹿一首并短歌

三諸之 神邊山尔 立向 三垣乃山尔 秋芽子之 妻卷六跡  
朝月夜 明卷齋視 足日木乃 山響令動 喚立鳴毛

(9 一七六一)

反歌

明日之夕 不相有八方 足日木乃 山彦令動 呼立哭毛

(9 一七六一)

右件歌或云柿本朝臣人麻呂作

この歌は長歌体であり、「詠」という題詞からいって、鹿を詠む歌のなかでも特異な位置を占めている。この歌については別稿の用意があるが、ここでは、歌中に「鹿」という語を詠まないながら、題に示されるとおり「鳴く鹿」が主題とされていることを確認しておきたい。そこに、題と歌の表現の密接な関係がみられることは明らかである。

さらに、この歌は、季節によって分類された歌巻である巻八・巻十に収載されていないが、「鳴く鹿」が表現されていることや、ハギと取り合わせられていることから、秋の〈物色〉を題とする詠物の長歌であるといえるだろう。

このようにみると、「鹿鳴」「鳴鹿」の題を持つ歌には、「鳴く鹿」のさまが詠まれているという共通した表現上の特徴が指摘でき、明確に秋の物色として位置づけ、詠題とすることが窺える。

ここで用字の面からも確認しておく。

題詞は漢文体で記され、「鹿鳴」と「鳴鹿」の両例がみられたが、歌中の用字としては、「鹿鳴」が七例(8 一六〇〇「鹿鳴山邊之」、一六〇二「鹿鳴山邊尔」、一六〇三「狭尾壯鹿鳴哭」、10 二二四三「左小壯鹿鳴裳」、二二四七「沙小壯鹿鳴母」、二二四九「小壯鹿鳴成」、二二五〇「棹壯鹿鳴母」)、「鳴鹿」が四例(8 一五一「鳴鹿者」、一六〇九「鳴鹿毛」、一六一「鳴鹿之」、10 二二五六「鳴鹿之」)みられるだけである。鹿を詠んだ歌が六十首あるなかで、例は非常に少ないといってよい。しかもそのほとんどが、サヲシカナクやナクシカノといった表現に対応する表記であって、漢語として用いられたとは考え難いのである。

翻って題詞についても、「鳴鹿」とある例は、従来この二字でシカとよませるなどされてきたが、ナクシカとよんで和語による表記として捉える方が妥当であるだろう。ただしその場合でも、「鹿鳴」と同様に歌の主題を意味していることには変わりない。

中国文学において、「鹿鳴」が『詩経』を典拠とした表現であったのに対して、一部にみられた「鳴鹿」が景の叙述部や地名であったことを考えると、万葉集中での「鹿鳴」「鳴鹿」の表記は、和語



的なものであり、漢文体である題詞において、中国文学の用例が意識されたといえるだろう。

なお、『懷風藻』においても、次のように「鳴鹿」の用例がみられる。

五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。賦得稀字。

玉燭調秋序。金風扇月幃。

新知未幾日。送別何依依。

山際愁雲斷。人前樂緒稀。

相顧鳴鹿爵。相送使人歸。

(63 刀利宣令)

これは新羅の使いを招いて催された送別の宴での詩であり、中国文学における『詩経』を典拠とした「鹿鳴」そのままの内容である。秋のものとして詠まれているのは、宴が秋日に催されたからに過ぎない。万葉集にみられたような、秋の物色の意識によるものでないことは明らかである。「鹿鳴」との語順の違いがあるとはいえ、先掲の『春秋左氏伝』や『宋書』にも「鳴鹿」の語順による用例が見出され、中国文学の語彙や表現が改変されることなく用いられているとみてよいだろう。

同じく中国文学における「鹿鳴」を踏まえたと思われる、次のような例もある。

五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。賦得風字。

嘉賓韻小雅。設席嘉大同。

鑿流開筆海。攀桂登談叢。

盃酒皆有月。歌聲共逐風。

何事專對士。幸用李陵弓。

(60 背奈王行文)

これも同じく、長屋王邸での新羅の使人への送別の宴で作られた詩である。「嘉賓韻小雅」とは、『詩経』小雅の「鹿鳴」中の「我有嘉賓，鼓瑟吹笙」といった部分を踏まえた表現であると思われる。以上のようにみえてくると、万葉集中の「鹿鳴」「鳴鹿」の題は、中西氏が指摘されたとおり鳴く鹿を詠む歌を一括する題であり、ここには『詩経』の影響が窺えた。しかし、歌の内容には中国文学的な「鹿鳴」は影響しておらず、題に「鹿鳴」「鳴鹿」を持つ歌群にみられる類聚の意識も、中国文学とは異なる発想をもとに行われていたとみられる。そして、「鹿鳴」という語を題に持ちながらも、万葉集においては漢語そのままではなく、「鳴く鹿」という和語として用いられ、その表現を持つ歌が集められていたといえるだろう。

「鳴く鹿」についてはないが、花鳥における擬人化は詠物詩の表現の影響を受けていることが、芳賀紀雄氏によって指摘されている。<sup>(16)</sup>

「鳴く鹿」についても、『詩経』の鹿鳴詩において、鹿が鳴く様が

友を呼ぶこととして擬人化されていたことに、影響を受けた可能性は高い。しかし、そうした影響下にありながらも、万葉集中では、独自の“鳴く鹿”の概念に基づく表現の類型が形成されたとみられる。そして、そのような万葉集における物色としての“鳴く鹿”の形成は、平城遷都以降の倭歌特有の現象として捉えることができるのである。

## 六 おわりに

以上みてきたように、万葉集の後期において、“鳴く鹿”の詠題化と擬人化を伴う類型化がみられた。そこに、「鹿鳴」の語彙と詠物の発想という中国文学の影響は窺えるが、ひじょうに限定された範囲であることが確認できた。

また、物色としての表現の類型では、ハギとの取り合わせが特徴的であるが、そもそもハギが倭歌特有の素材である。なかには『詩経』の鹿鳴詩にみえる「苹」や「蒿」や「荅」のいずれかを、日本のハギに当たるとはならないかとみる向きもあるが、いずれもハギと言い得る論拠はないといえる。

物色とは、言語による季節の景のシンボル化であると捉えると、むしろ一種のイメージの産物としてハギと鹿の取り合わせを読み解くべきではないかとさえ思われる。

飛躍するが、正倉院宝物の「麟鹿草木夾纈屏風」（北倉44）など

にみられる鹿の意匠においては、抽象化されシンボル化された草木が鹿に付き物となっていることが想起される。図像と言語の差はあるが、万葉集中には屏風絵をもとにした作歌と思われる例（610一六・9一六八二など）もみられることから、物色という景物表現の発想と、通底する認識を捉えることも可能かと考える。

以上、“鳴く鹿”が擬人化のうえで類型化されると同時に、詠物の題として認識されることで、倭製の物色として成立したものと考える。そこに、自然の景を名付け、観念化することで昇華させた、和歌文学の特徴的な営為を見出すことができると思われる。

※引用した本文は、鶴久・森山隆編『万葉集』（おうふう）、山口佳紀・神野志隆光校注『古事記』（小学館・新編日本古典文学全集）、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注『日本書紀』（小学館・新編日本古典文学全集）、石川忠久校注『詩経』（明治書院）、内田泉之助・網裕次校注『文選』（明治書院）、汪紹楹校『藝文類聚』（中華書局）に拠った。

### 【注】

- (1) 奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき（『古今集』秋上二二五／詠み人知らず）など
- (2) 岡崎義忠「万葉集と季節」『多磨』昭和十七年四〜十月号（昭17・4〜10）（『古代日本の文芸』（昭18・5）所収）
- (3) 中西進「雄略御製の伝誦」『万葉』四二号（昭37・1）（『万葉集の

比較文学的研究』上)

- (4) 稲岡耕二「舒明天皇、齐明天皇(その一)」「国文学解釈と鑑賞」昭和四十五年十一月号
- (5) 吉村誠『万葉集』鹿鳴歌「今夜は鳴かずい寝にけらしも」の一解釈『群馬県立女子大学国文学研究』創刊号(昭56・3)
- (6) 拙稿「『秋芽子』の形成―〈物色〉の倭製―」『万葉古代学研究所年報』二号(平16・3)
- (7) 芳賀紀雄「歌人の出発―家持の初期詠物歌―」『日本古代論集』(笠間書院、昭55)
- (8) 辰巳正明「物色―古代詩歌の景物表現―」『日本文学研究』一五号(昭51)(『万葉集と中国文学』(笠間書院、昭62)所収)
- (9) 拙稿「〈物色〉の倭製―「沫雪」の場合―」『万葉古代学研究所年報』一号(平15・3)、「倭歌における『物色』について―赤人の春雑歌四首―」『天平万葉論』(翰林書房、平15・4)
- (10) 廣岡義隆「はるかなる鹿鳴―『音之亮左』攷―」『美夫君志』一五号(昭47・3)、新谷秀夫「妻呼ぶ鹿の《音之亮左》―『音』をめぐる表現・小考―」『高岡市万葉歴史館紀要』一三号(平15・3)
- (11) 拙稿「鳴く鹿を詠む歌―詠物長歌の位相―」未発表
- (12) 岡崎義恵「万葉集と季節」『多磨』昭和十七年四〜十月号(昭17・4〜10)(『古代日本の文芸』(昭18・5)所収)
- (13) 甲斐睦朗・石黒由香里氏「物の名・植物と動物の歌ことば―「萩」と「鹿」をめぐって―」『ことばの神語学』古代文学講座7(勉誠社、平6・11)
- (14) 小島憲之「『トガ野』の鹿と『ヲグラ山』の鹿―萬葉伝誦歌をめぐって―」『万葉』九号(昭28・10)、伊藤博「舒明朝以前の万葉歌の性格」『国語国文』三四二号(昭38・2)などをはじめ、多数。
- (15) 馬駿「漢籍との比較から見た『鹿鳴』の歌―その巻頭性と表現性を中心に―」『国語国文研究』一〇五号(平9・3)
- (16) 芳賀紀雄「萬葉集における花鳥の擬人化―詠物詩との関連をめぐって―」『記紀万葉論叢』塙書房(平4・5)